

公益財団法人 北九州産業学術推進機構
事業推進部長

不易流行に思うこと

田中 規雄
Norio Tanaka



北九州市役所に入職して今年で25年になる。

ご存知のとおり、市役所の仕事は環境、教育、福祉など市民生活に関わる様々な業務を行っている。そのなかにあつて、私は役所人生の大半を地域産業振興、特に工業振興に携わってきた。

配属当初は先輩に連れられて企業の製造現場に行くたびに新しい刺激を受けた。文系出身の私にとっては何もかもが初めて聞く言葉が多かった。「冶金」を「ちきん」と言っていた私にとって、製造現場で使われている言葉を聞き、理解することは非常に骨の折ることであった。

「金型」「溶接・溶射」「めっき」「歩留まり」「ロット」「かんぱん」、まるで異次元の世界に舞い降りたようであった。訪問した企業の担当の方や大学の先生から聞いた話をひたすらにメモを取り、役所に戻って辞書を引いて調べるという生活だった。当時はインターネットも普及しておらず、当然ウィキペディアもない時代。辞書で理解するには限界があり、現場に再度足を運び、しつこく質問していたことを思い出す。随分とご迷惑をおかけしたのではないかと思うが、現場の方々は忙しい最中に時間を割いて、ていねいにわかりやすく説明してくれた。今にして思えば、その時の経験が現在の私の大きな知識基盤となり、現場主義という私の仕事観の礎になっていると思う。

現在は管理職という立場になり、現場に出ていく機会も少なくなったが、部下には「靴底を減らして現場に出ろ」「動いてなんぼ」と民間企業の営業部門さながらの叱咤激励をしている毎日である。

ところで、25年も産業振興の仕事をしていると時代の変遷を感じるとともに、逆に変わらないものや回帰されたものがあることに気づかされる。20年前の1990年代初期はバブル景気の崩壊により経済は停滞期に入っていたが、当時はその影響はあまり深刻に受け止められていなかった。「WINDOWS 95」の登場によりインターネットが爆発的に普及し、パソコンやそれに付随する半導体、電子部品が活況を呈した時代であった。

まさに軽薄短小がもてはやされていた時代であり、「重厚長大はもう古い」と産業構造の早期転換が声高に叫ばれていた。鉄の町である北九州も産業政策として、鉄に代わる新しい産業おこしに取り組みはじめたところであった。

現在はどうなっているのか？

大手電機メーカーはグローバル時代の中で競争にさらされ、巨額の赤字を計上し、半導体のDRAMを製造する日本企業はひとつもなくなった。当時はなくなるすら想像できなかった大手企業が整理・統合され、その名前が消えていく激変のなかにあつて、力強く環境変化を乗り切った市内中小企業は多数あることも事実だ。これらの企業は劇的に業種転換を図ったものではないとつくづく感じる。

自社の保有する基本技術を大切にしながらも、新しい市場の開拓はもちろんのこと、取り扱う加工分野を広げたり、不断の改善努力により生産性を高めたりなど様々な努力を行った結果である。

不易流行という言葉がある。私はその言葉を初めて知ったのは、ある市内中小企業の社長の経営理念の話聞かせていただいた時だった。もともとの言葉は俳諧の用語であり、松尾芭蕉が「奥の細道」で体得した概念を表すものである。言うまでもなく「不易」とはいつまでも変わらないことである。時代がどんなに移り変わっても変わらないもの、変えてはいけないものがあるということである。言いかえれば不変の真理である。

「流行」とはその名のごとく、時代々々の節目において変化していくこと、状況に応じて変えていかないといけないものがあるということである。

つまり、「不易流行」ということは本質を見誤らずに、いつまでも変化しない本質をベースに、常に自分の芯になるものを持ちつつ、新しい変化を取り入れ、それを重ねていくものと言える。単純に軽薄短小が良くて、重厚長大は古いというものではなく、ものの本質を見極めて自身を変化させていくことが非常に大切だと感じている。

欧米流ではM&Aで新しい道を手っ取り早く取り込めばいいという考えがあるみたいであるが、果たして日本、特に地域の企業にこの手法が根付くかどうかは、甚だ疑問である。不易流行こそが環境変化に柔軟に対応し、事業継続していくための重要な切り口ではなからうか。

フジコーさんの製品開発の取り組みはまさに不易流行、そのもののモデルではないかと思う。「溶接・溶射技術」という自社の本質となるコア技術を活かし、製鉄産業の変化に対応していきながら、一方でこのコア技術を新しい光触媒技術と融合させ、高殺菌や薄膜太陽電池分野など新しいものに挑戦していく。こうした姿は重厚長大のモノづくり産業にとって大きなモデルとなるものであり、今まで日本を支えていた基盤技術がいかに色々なものに応用可能であるかを指し示す「羅針盤」であると思う。

北九州市の産業が成長していくためには、この「不易流行」にヒントがあるのではないかと思う。

我々、FAISも微力ながらフジコーさんの技術開発の取り組みをご支援をさせていただいている。是非、開発した製品が経営の大きな柱となり、売上げにつながっていくことを期待している。

流行語大賞ではないが、「じぇじぇじぇ」という驚くような成果があがり、我々の支援した成果が北九州市の雇用増加や地域経済の活性化となって、「100倍返し」となっていくことを信じて疑わない。

私の生まれ育った郷土が不易流行により、今後も栄え、活力のある街になっていくため、日々老化していく心身を奮い立たせながら、今後も努力してまいります。